

■ 編集だより

編集後記

第15回世界精神医学会総会 (World Congress of Psychiatry: WCP) は、本年9月18日より22日の期間、南米アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスにて開催された。福岡空港を離陸して30時間以上、「母をたずねて三千里」と幾度となく呟いた長旅にいささか疲労した私を待っていたのは、学会場の混乱と喧噪であった。

今回、南米で最初に開催されたWCPであり、周辺のウルグアイ、ブラジル、チリ、ペルーなどの国々からも多数の参加者があった。主催者によれば13,000名に達したらしい。ところが、会場は、市内の大きなホテルとはいえ、とても10,000名を超える出席者を擁するだけのキャパシティがあるとは思えず、どの会場もすぐに満杯となった。なにより、運営面での不備が目立った。なにしろ、事前登録をしていたにもかかわらずネームカードとプログラム・抄録集を受け取るのに3時間も列に並ばなければならなかったのである。行列は、受付のあるフロアから上のフロアに上がり、とうとう戸外にまで長く続いていた。皆、わいわいがやがやお喋りをしながら、数時間を過ごすのである。私も前に並んだエジプトの精神科医と一緒に学会事務局をののしった。時々、死者も出るサッカー場の混雑もこんな感じなのだろう。ようやく自分の番が回ってくると、学生のような若い女の子が手作業でネームカードをプリントしてくれた。やれやれ、これでは時間がかかるはずである。その上、会場の案内も十分ではなく、PCプロジェクタの受付も誰かに聞いて探り当て、自分で勝手に端末を操作して原稿を登録した。シャトルバスはなし、ランチタイムは食べ物にありつけるまでに1時間以上かかる等々、万事がこの調子である。最後は、ここは南米である、風土も気候 (日本のちょうど地球の反対側に位置するので、春先であった) も異なれば、時間感覚も違うと達観するほかはなかった。

混雑する会場で邂逅する日本人もまばらではあったが、新福尚隆先生がオーガナイズされたひきこもり (Hikikomori) の国際共同研究に関するシンポジウムや金吉晴先生、秋山剛先生らによる東日本大震災関連のワークショップは、海外の関心も高く、各国の参加者から熱心な質問が寄せられていた。

国際学会といっても、これまで私は欧米や中韓で開催された学会にしか行ったことがない。その点、今回のWCPに参加して、世界各国に固有の精神医学の歴史があり、それぞれに抱える問題があると強く感じた。例えば、開催国のアルゼンチンでは、今も精神分析学が重要な位置を占める。WCPの基調講演の講師も、英国の精神分析医、Peter Fonagy氏であった。これは、1980年代初頭までこの国を支配し続けた軍事政権との微妙な緊張関係の上に築かれたものらしい。もっとも現在は、10年前の経済破綻以来、貧困層におけるメンタルヘルス政策が急務の課題となっている。

世界にはDSMに象徴される米国精神医学以外の精神医学の文化が現在も色々ある。WCPでは米国精神医学に対抗する立場からの発言も結構聴くことができる。必ずしも米国精神医学に組み込まない主張の発信の場であることも、WCPの意義の1つに違いない。このことは、9年前のWCP横浜大会の時にはあまり意識しなかった。そう思うと、運営に対する不満と疲ればかりを口にしていた今回の旅も、それなりに豊かな収穫があったように感じられるから、人の心とは不思議である。今は、街中で聴いた哀愁に満ちたタンゴの響きが耳の奥に残っている。

黒木俊秀